

論文審査の結果の要旨

氏名：中村 かおり

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：初年次教育におけるアカデミック・ライティングの指導法に関する研究
—アカデミックな共同体の一員としての意識を出発点に—

審査委員：(主査) 教授 島田めぐみ

(副査) 教授 保坂 敏子 教授 古賀 徹

論文審査要旨

1. 本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章 研究の背景と目的

- 1.1 初年次ライティング教育における新たな指導法の必要性
- 1.2 レポートの内容と形式に同時にアプローチするには
- 1.3 レポート・ライティングの「原理」とは
- 1.4 概念型授業デザインにおける「一般化」と「概念」
- 1.5 本研究の枠組みとなるデザイン研究
- 1.6 本論文の目的と構成

第2章 レポート指導におけるアカデミックな文脈の示され方に関する調査

- 2.1 本章の目的
- 2.2 教材調査
- 2.3 教員へのインタビュー調査
- 2.4 本章のまとめ

第3章 初年次ライティング指導の課題と研究課題

- 3.1 アカデミック・ライティングに関する研究
- 3.2 日本の初年次ライティング教育における主な指導法
- 3.3 初年次ライティング教育における問題設定への支援の現状
- 3.4 アカデミック・ライティング指導に用いられる主なアプローチの重心と課題
- 3.5 実践に向けた課題のまとめ
- 3.6 課題に対する解決方法の検討
- 3.7 解決方法とミクロな概念
- 3.8 本研究の研究課題と全体図

第4章 授業デザイン

- 4.1 授業デザインの枠組みとなる ID 理論
- 4.2 問題設定に関わる指導内容と方法
- 4.3 形式に関わる指導内容と方法
- 4.4 授業全体に関わる学習支援方法
- 4.5 本実践に取り入れる授業デザイン
- 4.6 本章のまとめ

第5章 授業デザインに基づく授業実践（1 サイクル目）の結果

- 5.1 実践の概要
- 5.2 初年次クラスにおける実践
- 5.3 実践群と非実践群のレポート評価の結果と分析
- 5.4 インタビュー調査の結果と分析
- 5.5 本実践の評価

- 5.6 授業デザインの修正
- 第6章 修正版授業デザインに基づく授業実践（2サイクル目）の結果
 - 6.1 実践の概要
 - 6.2 初年次クラス（2サイクル目）における実践
 - 6.3 実践群（2サイクル目）と非実践群のレポート評価の結果と分析
 - 6.4 事前事後のアンケート調査の結果と分析
 - 6.5 インタビュー調査の結果と分析（2サイクル目）
 - 6.6 成功者と未成功者のインタビュー調査の結果と分析
 - 6.7 2サイクル目の実践のまとめ
- 第7章 初年次生に対する実践のまとめ
 - 7.1 1サイクル目と2サイクル目の総括
 - 7.2 1年後（2年次終了時）のフォローアップインタビュー調査の結果
 - 7.3 研究課題に対する結果
- 第8章 レディネスや専門の異なる学生に対する実践と評価
 - 8.1 大学院生に対する実践と評価
 - 8.2 研究留学生に対する実践と評価
 - 8.3 非日本語母語話者の大学院生に対する実践と評価
 - 8.4 本章のまとめと考察
- 第9章 コメントシートを書くことによるレポートへの効果
 - 9.1 コメントシートを活用する意義と詳細
 - 9.2 実践の概要と結果：ケース1（評価なし）の場合
 - 9.3 実践の概要と結果：ケース2（評価あり）の場合
 - 9.4 学生に対するアンケート調査
 - 9.5 インタビュー調査
 - 9.6 本章のまとめと考察
- 第10章 本研究のまとめと今後の課題
 - 10.1 内容と形式をつなぐ初年次アカデミック・ライティング指導のデザイン原則
 - 10.2 本研究のデザイン原則のまとめ
 - 10.3 本研究の意義と今後の課題

謝辞

参考文献

資料

2. 本論文の概要

本論文は、大学の初年次教育の一環として行われる日本語でのレポート・ライティング指導において課題とされている、「何を書くか」という内容と、「どのように書くか」という形式の両面に対し、同時にアプローチ可能なアカデミック・ライティング (Academic Writing: AW) の指導法の提案を目指すものである。

第1章では、内容と形式の両面にアプローチする方法として、概念型授業デザインが適していることを示し、その出発点として初年次生に対してもアカデミックな共同体の一員としての意識づけが求められることを主張している。本研究の目的として、初年次生に対する AW の指導に向けて共有資源を提供することを目指し、そのための方法として、本実践をデザイン研究の手法で行うことの意義について述べている。現状を把握するために、第2章では、初年次生向けのライティング教材 35冊を対象とした調査と8名の教員に対するインタビュー調査を行っている。初年次生向けのライティング教材では、学問的文脈とは関連づけられておらず、内容に新規性や検証可能性が求められる点についても、ほとんど示されていなかった。初年次生のライティング指導にあたる教員にも、同様の傾向が見られた。第3章では、デザイン研究の最初のステップである「問題の同定と分析」のために、初年次生に対する AW 教育の先行研究を概観している。まず、ライティングの先行研究のうち、ライティング指導の基盤となっている文章産出過程モデルと知識構成型ライティングのモデルに沿って、AW に主に用いられてきた指導法を分析し、主な3つのアプローチの重点と課題について考察している。次に、文章産出過程モデルを中心に、本研究が取り組むべき課題

と、その課題に対する解決方法の検討とともに、概念型授業デザインに必要なマイクロな概念の抽出を試み、その上で、本研究の研究課題として以下の5つを挙げている。

(1) 研究課題1：論文やレポートを用いた分析タスクは、初年次生に対するアカデミックな書き方への支援として有効か。

(2) 研究課題2：見通しを持ったストーリー作成は、問題設定への支援として有効か。

(3) 研究課題3：協働学習によるプロセスの言語化は、AWスキーマの形成に有効か。

(4) 研究課題4：コメントシートを書くことはレポートを書く力の向上に有効か。

(5) 研究課題5：本実践によるアカデミックな共同体の一員としての意識づけは、書くことに対する態度変容に有効か。

第4章では、複数のインストラクショナル・デザイン (Instructional Design : ID) 理論を用いて、具体的な授業デザインについて検討している。メリルのID第一原理、ライゲルースの精緻化理論、コリンズ他の認知的徒弟制、発見的学習法の導入等を軸に、問題設定、形式、授業全体に関わる指導方法について検討している。それらから、活動の指針を決定し、その指針に沿った具体的な活動を考案し、本研究の授業デザインとしてまとめている。授業デザインは、「1. アカデミックな共同体の理解と、その一員としての意識づけ、学問の広がりへの理解」から「9. レポートの推敲」までの9段階からなる。そのうち、「1. アカデミックな共同体の理解と、その一員としての意識づけ、学問の広がりへの理解」のための指導内容を一例としてあげる。まず、学生が所属する大学は学問の府であることを意識させ、次に、論文やレポートには社会的意義のある新しい知見を示すという目的と、そのための検証可能な書き方が必要であることを「コロナ禍における研究成果」を例に挙げて示し、理解を促す。その上で、根拠の客観度・信頼度の異なる複数の文章を比較しながら、アカデミックな文章に必要な点(学問的意義の提示、恣意性の排除、検証可能性を示す書き方等)について分析を行い、アカデミックな場に共通の客観性や検証可能性について考えさせる、という活動が考えられている。

第5章では、第4章で作成した授業デザインに沿って16名の初年次生を対象に1サイクル目の実践を行い、その結果を検証している。まず、初年次クラスでの観察とレポート分析から、本実践の問題設定への支援が有効であることが示されている。次に、実践群、非実践群の専門科目のレポート分析から、実践群の専門科目のレポートは、合計の点数と「文章の構成や流れ」の評価が有意に高く、文章の構成に効果が認められた。また、実践群の専門科目のレポートには、授業資料以外の文献の引用が複数見られ、先行研究への意識づけが進んでおり、書くことに向かう態度への効果がうかがえた。そして、インタビュー調査を行い、本実践が初年次生にとってインパクトのある体験になっており、ライティングに向かう態度にプラスの効果を与えていることが示唆された。しかし、専門科目のレポートでは、レポート形式やアカデミックな書き方が不十分であり、引用の後の解釈等、論拠となる理由づけが十分になされないという問題も見られている。学生に対するインタビュー結果からもそれらへの意識が低いことがわかったため、形式面に注目させ、理由づけへの意識を持たせるために、授業デザインの修正を行っている。

第6章では、第5章で検討した修正版授業デザインに沿って16名の初年次生を対象に2サイクル目の実践を行い、その結果を検証している。まず、初年次クラスでの観察とレポート分析から、本実践の問題設定への支援に加え、引用およびレポート形式にも効果が認められた。形式面への支援は1サイクル目では不十分であったが、2サイクル目では問題設定の質は維持したままで、形式面の改善が見られた。次に、実践群、非実践群の専門科目のレポート分析では、実践群のレポートに、問題設定、形式面ともに効果が見られ、先行研究への意識づけが進んでいることが確認された。そして、授業開始時と終了時の実践群と非実践群の学生に対するアンケート調査の結果、および終了時のインタビュー調査の結果から、実践群ではレポート・ライティングのプロセスに関するスキーマ形成が、新規性や検証可能性といったアカデミックな文脈に関連づけられて進んでおり、これにはタスクによる活動が影響していることが示唆された。

第7章では、1サイクル目と2サイクル目の実践結果から、研究課題1から5に対する結論をまとめている。学生のレポートの質が、内容、形式ともに求められる水準にあり、ライティングに向かう際には、アカデミックな文脈を意識し、書くプロセスをメタ的に認知していたことが明らかになった。これらは本実践でデザインしたものに深く関わるため、実践による介入により、AWに対する学生の取り組み方への効果が認められた。

第8章は、修正版授業デザインのうち第7章で介入の効果が認められた活動に関し、それらが文脈を超えて効果があるかどうかを検証している。実践は、アカデミックなスキーマ形成などのレディネスや専門の異なる大学院生や研究生などを対象に行い、そこで対象者から得られた評価について整理し分析してい

る。その結果、研究課題 1、2、3、5 に関しては、これら 3 回の実践においても、本研究でデザインした活動の効果が確認された。第 9 章では、研究課題 4 のコメントシートを書くことによる効果について、初年次生に対する支援策を広く考察するために、専門科目での実践によって検証している。その結果、コメントシートを書くことは、そのままライティング・スキルの向上に役立つものではないが、授業内容を整理し、学びを促進する役割があることを明らかにしている。

第 10 章「本研究のまとめと今後の課題」では、ここまでの実践を踏まえ、初年次 AW 指導に関して、以下の 7 つの「デザイン原則の提案」を試みている。

原則 1：アカデミックな共同体の一員であるという自覚と書く目的への意識を持たせる

原則 2：興味のあるテーマの論文を探して読ませ、アカデミックな世界に引き入れる

原則 3：書き方の特徴をサンプル分析タスクによって発見させる

原則 4：背景、問い、答え、根拠の見通しを立てながらストーリーラインを作成させる

原則 5：AW の概念を協働学習により言語化させる

原則 6：書くためのプロセスを段階的に体験する機会を与え、メタ的に捉えさせる

原則 7：ピア・レビューにより読み手への意識を持たせる

そして、本研究の意義が以下の通り述べられている。

- (1) 概念型デザインにより、初年次生向けの時間が限られたライティング指導の出発点として、アカデミックな共同体の一員としての意識づけを出発点とすることを提案したこと。
- (2) 初年次生向けのライティング指導において、内容面と形式面の双方にアプローチするために、上記の 7 つのデザイン原則を提案し、初年次クラスで同じようにライティング指導にあたる教員に共有資源を提供したこと。

3. 本論文の成果と問題点

本研究では、関連教材の分析、教員へのインタビュー結果から、学問的文脈とは関連づけられていないことを把握した上で、2 回にわたる実践を行っている。その結果、アカデミックな共同体の一員としての意識を持たせ、それを AW の内容面と形式面の双方に関連させる指導法を提案しており、これは本論文の成果と言え、高く評価できる。また、これらは、初年次教育の場面だけではなく、広く応用できるものであることも評価できる。

一方で、本論文にはいくつかの問題点が認められる。

新型コロナウイルス感染症蔓延の中での実践であったため、計画変更を余儀なくされることがあったこと、授業デザインの検証が 2 サイクルと多くはないことなどが指摘できる。また、第 8 章では大学院生や研究生、海外の大学院生を対象に実践をおこなっている。本提案が初年次生以外にも応用可能であることを示すという目的があったものの、本研究の課題に対して妥当だったかの疑問が残る。

上述のように本論文には不十分な点がいくつか挙げられる。しかし、それらは本論文の学術的成果の価値を損なうものではない。

以上のことから、ここに審査員一同は、本論文が当該分野の研究に寄与するに十分な成果を挙げたものと判断する。よって、本論文は博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

令和 5 年 1 月 10 日